

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●九州工業大学情報工学府

「モジュール積み上げ方式の分野横断型コース」の事例

(具体的に何を実施したのか)

時代と社会のニーズに呼応し、キャリアパスを意識した学際的な知識と技術を身に付けた人材を輩出することを目的とし、コース・モジュール制という新たなコースワークの枠組みを考案し、分野専攻横断的な体系的なコースワークを構築した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・従来の枠組みである専攻の範囲に捉われず、全専攻から委員が参加する大学院委員会を中心に、効果的な教育ができるように全専攻の科目を横断的に組み合わせモジュールやコースを設定した。研究室での学術的研究は修士論文として従来通り行うこととし、コース修了条件は、講義での単位取得によるものとした。
- ・学生から見てキャリアパスが意識できるようなコース設定とした。
- ・学生にモジュール、コースの趣旨をきちんと伝えるために、毎年度コース・モジュール制の説明冊子を作成し、全学生に配布している。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

全専攻を対象とした分野専攻横断型でのコースワークにしたことにより、専攻を越えた幅広い範囲から体系的な8つのコースを設定することができた。これらコースを履修した学生は、研究室での学術的研究を深めるだけでなく、キャリアパスを考えた体系的な知識の習得ができたものとする。また、学生へのアンケート結果では、コース・モジュール制に対して、約84%の学生から「目立った成果が得られた」および「ある程度成果が得られた」という回答が得られている。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

①複数教員による多面的な指導体制の整備

●九州工業大学情報工学府

「モジュール積み上げ方式の分野横断型コース」の事例

(具体的に何を実施したのか)

多面的かつ継続的な指導体制を整備することを目的とし、複数指導教員による指導体制を整備した。大学院入学時に各学生に対して主1名、副2名の指導教員を決める。学生は、各学期の初めに研究開発計画書を作成し、主副3名の指導教員に提出する。主副指導教員はその計画書を基に講義の履修状況と研究の進捗状況をチェックしアドバイスするなど、各学期ごとの定期的な指導を行う体制とした。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・複数指導教員制が実質的な効果が出るように、副指導教員を割り振るだけでなく、同時に半期ごとの研究開発計画書の提出の義務化を実施した。
- ・指導の記録が残るように、学生の提出した研究開発計画書に主副指導教員のコメントを記入する欄を設けた。
- ・多面的な指導を行うために、専門分野が同じ分野の教員だけでなく、専門分野が異なる教員も副指導教員となるような体制とした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・複数指導教員制と半期ごとの研究開発計画書の提出を同時に実施したことにより、学生は多面的なアドバイスを得られることになった。
- ・半期ごとの研究開発計画書の提出の義務化により、学生自身が定期的に履修状況と研究の進捗状況を文章化し自己チェックする機会を与えることとなった。
- ・学生だけでなく、主指導教員も半期ごとに学生の進捗状況をチェックする機会ができたと同時に、副指導教員のチェックが行われるため、主指導教員自身の学生指導の自己チェックを行う仕組みにもなった。
- ・学生によるアンケート結果では、複数指導教員制に対して約77%の学生が「とても良い」および「良い」との回答をしている。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

●九州工業大学情報工学府

「モジュール積み上げ方式の分野横断型コース」の事例

(具体的に何を実施したのか)

科目の積み上げを容易にし、学生の理解度向上を目的として、一つの科目で週2回講義を行うことを前提とした1年間を4分割するクォーター制を導入した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

従来の前後期制と併用が可能となるように、前期と後期をそれぞれ半分ずつに区切る形でのクォーター制とした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・同じ科目を週2回講義行うことにより、前回の講義内容を学生が覚えており、講義が進めやすくなったと同時に学生の理解度が向上した。
- ・学生へのアンケートでは、約80%の学生が「とても良い」および「良い」との回答をしている。